

村の牛玉宝印

坂本亮太

はじめに

和歌山県下の村々では、各村の寺社の名前を記した牛玉宝印が正月（多くがおこない行事終了後）に配付され、参拝者は牛玉宝印を各自の家に持ち帰り、それを玄関や水口で祀ったり、「なれなれ柿の木、ならんかったらほったにしょ」と歌いながら柿の木の芽を撫でる成木責めなどの道具として使ったりした（現在このような習俗が行われている村もあれば、既に伝承・記憶のみとなっている村もある）。ご存じのとおり、和歌山県南部には熊野三山（本宮・新宮・那智）があり、そこで発行された牛玉宝印は、起請文の料紙や護符（お札）として利用され、全国的に普及していた。このような大寺社（霊地・霊場）で発行された牛玉宝印と、村々で発行された牛玉宝印はどのような関係にあるのか、その影響関係、普及過程などについては、改めて検討する必要があるだろう。⁽¹⁾

牛玉宝印について相田二郎氏は、①地方的牛玉宝印、②普遍的牛玉宝印と分類し、①については東大寺や東寺などを例に近接する地域に限りて用いたものと、高野山や阿蘇大社などを例に一国内の人々が用いたものとする。⁽²⁾ あくまでも霊地・霊場で発行された牛玉宝印が対象となっている。ただ、民俗事例も踏まえると、村（の寺社）が発行し、一村内限定で利用される牛玉宝印が存在する点にも留意する必要がある。村に限定され（局地

的)、村の寺社(村堂・村鎮守)が象られた牛玉宝印を「村の牛玉宝印」と指定し、本稿ではこのような牛玉宝印の広がりや使用状況(その文化)について、和歌山県をフィールドに民俗・版木・文書をもとに検討していきたい。⁽³⁾

一 「牛玉」の民俗

和歌山県下では、「牛玉」「牛王」(ごおう)と名のつく(また道具を使った)行事が数多く行われている(本稿では原則「牛玉」で統一し、既存の報告例に従って「牛王」も用いた)。牛玉宝印を刷って配付する行事もあれば、牛玉杖(ゴウ木、ゴウ(の)杖などと呼ばれ、牛玉宝印を木の枝に挟んだ棒状のもの)を用いる祭礼などもある。まずは、そのような行事を一括して「牛玉」の民俗として捉え、祭礼行事の特徴や、地域的な傾向を見ていきたい。自治体史など既存の報告などをもとに、「牛玉」の民俗についてまとめたのが表1である。修正会(おこない)のなかで、牛玉宝印(牛玉紙)や牛玉杖が用いられることは明らかである。⁽⁴⁾

また、一見してわかるのが、地域的な傾向である(図1)。紀伊半島沿岸部、紀南(西牟婁郡・東牟婁郡)ではほとんど見られず、高野山周辺(山麓)に非常に濃密に分布する傾向を見て取ることができる。北は紀の川北岸(葛城山脈)まで、東は少なくとも奈良県境まで及ぶ。南は日高川流域まで、西は日高川町中津村・紀美野町・紀の川市(旧打田町)、貴志川の南北ライン(とその延長)が境となる。高野山領荘園の範囲とは異なるが、高野山を核に広がっている様は読み取ることができよう。高野山の「旧領」よりも少し広がりをもった地域である。牛玉宝印文化の中心とも考えられる熊野三山周辺(西牟婁郡・東牟婁郡)では村で牛玉宝印を刷り、配付する行事(＝「牛玉」の民俗)が見られず(ただ、修正会は熊野三山でも行われており、那智勝浦町大泰寺でもパチパチが行われている)、むしろ高野山麓で特徴的に見られる点が興味深い。

村の牛玉宝印

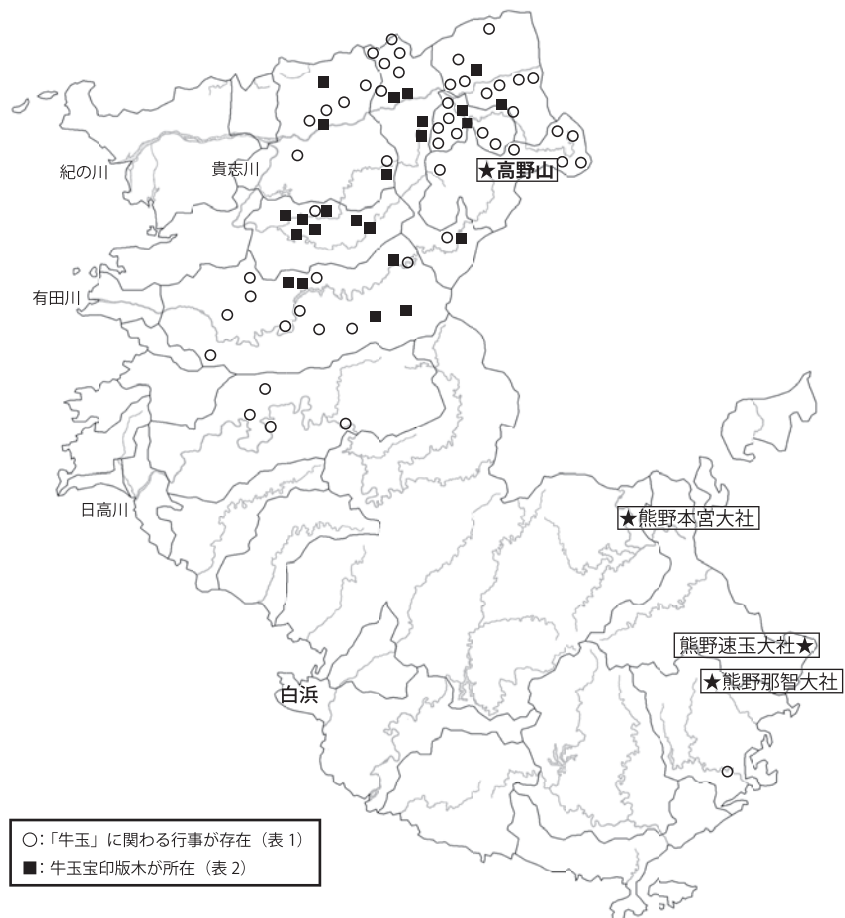


図1 和歌山県下の「牛玉」行事・「村の牛玉宝印」版木分布図

表 1 和歌山県下の「牛玉（王）」にかかわる行事一覧

No	場所	名称	日付	牛玉（王）の民俗	使い方	そのほか要素	出典
1	高野町枝分・数丹生神社・龍福寺	おこない（宮の舞）	1/8	牛玉宝印、牛玉王、ゴチャ（ひ・ぜ・漆）	牛玉杖で御の頭を叩く仕草、ゴチャの札を線香で清める、成木貫め	宮の舞、弓打ち入座（16歳）	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
2	高野町上橋香西方寺	大般若	1/10	ゴチャの札		大般若経読誦	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
3	高野町中橋香延命寺	おこない	1/2	牛玉宝印	苗代の水口に立てる		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
4	高野町東置富阿弥寺	——	1/7	ゴチャの札	苗代の水口に立てる		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
5	高野町西置富阿弥院	——	1/7	ゴチャの札	苗代の水口に立てる		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
6	高野町花巻川神社	的射	1/7	牛玉宝印、福杖・ゴチャ（ひ・ぜ・漆）	苗代の水口に立てる、成木貫め	御田舞、弓打ち	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
7	橋本市般若堂福寺	修正会	1/8～1/10	牛玉杖、牛玉杖（ひ・ぜ）	牛玉杖を持って立ち杖を打つ仕草、忍竹に鷹符を挟み村境に立てる	神名帳、弓引き（弓打ち）	『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
8	橋本市西福王寺	堂座	1/6	牛玉宝印、牛玉杖（栗・ハゼ）	牛玉杖で扇子を叩く、宝印を頭上にめざす		『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
9	橋本市赤塚東光寺	修正会	1/6	牛玉宝印、牛玉宝持	成木貫め	大般若経読誦	『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
10	橋本市神楽薬師寺	おこない（般若入れ）	1/4	牛玉宝印、福杖	成木貫め	大般若経読誦	『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
11	橋本市向福観音寺	修正会	正月	牛玉杖			『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
12	橋本市蔵口町大野	修正会（慈徳院七社明神）	1/4	牛玉杖		的打ち	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
13	橋本市蔵口町伏原	（龍宮講）修正会	1/4	牛玉杖	成木貫め		『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
14	橋本市蔵口町田原	修正会	1/7	牛玉杖			『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
15	橋本市穴倉池地蔵寺	千部廻り講	1/17前後	牛玉札	牛玉札を鹿々に掛り付ける		『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
16	橋本市	神の年廻	1/6	牛玉杖			『橋本市史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
17	九度山町宮本薬師寺	おこない（明神講）	1/8	牛玉宝印、牛玉杖（ひ・ぜ）	水口祭り、玄關に祀る、轡土（あかつち）を酒で溶いて玄關を掃く、小豆粥あり、成木貫め	福打ち（鹿入）15歳男子、巫女舞（神楽師）	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
18	九度山町出地蔵寺	おこない（鷹鷹所講）	1/6	牛玉宝印、牛玉杖（ひ・ぜ）	笠の柱を叩く、牛玉宝印を出地に立てる、成木貫め	大般若経読誦	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
19	九度山町慈尊院	おこない	1/5	牛玉宝印、牛玉杖	成木貫め	入座	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
20	九度山町古沢安楽寺	おこない	1/5	牛玉宝印、牛玉杖、牛玉杖	大牛玉杖に牛玉宝印を挟み本堂額を叩く	神名帳	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
21	九度山町上古沢蔵前神社	おこない	1/6	牛玉札	成木貫め		『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
22	九度山町市又久保地区薬師堂	おこない	1/8	牛玉宝印、福杖（漆）	印紙を酒で溶いて使用、苗代の水口に立てる		『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
23	九度山町東郷東院	おこない	1/6	牛玉宝印、福杖（漆）	苗代の水口に立てる、成木貫め		『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
24	かつらぎ町東谷神野地区	修正会	1/2	牛玉杖（漆・ふし）	版木を紙に巻き杖の先に付けて読経し、畳の上を福杖で叩く（福入れ）、ゴチャ杖を持ち帰り供え、成木貫め。稲藁の束に田へ立てる		『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
25	かつらぎ町滝	おこない	1/24	牛玉宝印		神名帳	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
26	かつらぎ町山口	法福寺のおこない	1/10	牛玉宝印、牛玉宝印、福杖	牛玉杖を持ち本堂に贈られた玉米を叩く仕草をする	神名帳	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
27	かつらぎ町花園中地蔵（くり）	おこない（正月おくり）	1/8	牛玉宝印、福杖	福杖で成木貫め、牛玉宝印を福杖に挟み田畑に立てる	神名帳、大般若経読誦、矢射	『改訂九度山町史』民俗・文化財編 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』

村の牛玉宝印

28	かつらぎ町平大久保地 区定福寺	秋の人御堂のおこ ない	18	牛玉宝印 牛玉杖	福杖で床板を叩く、牛玉宝印を持って本尊の前に叩く仕草、牛玉杖を畑に立てる	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 大娘若経縁
29	かつらぎ町香山	阿弥陀堂	110	牛玉宝印 (涅槃寺)		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
30	かつらぎ町東谷西万寺	修正会	18	牛玉宝印 (西万寺)		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
31	かつらぎ町修	修正会	16	牛玉杖		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
32	紀の川市上瀬川久保地 区	おこない	18	牛玉宝印 牛玉杖・ツラヂ(いへ)	ツラヂで床を叩く、苗代の水口に立てる、牛玉宝印に玉珠を刺し結した「コノツタヤ」	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『熊山のなかのともら』
33	紀の川市東大井瀬古寺	福入れ	旧14	牛玉杖 (樹) 福杖 (樹)	福杖で床を叩く、福杖に牛玉宝印を巻き付け(引)で苗(イ)の水口に立てた	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
34	紀の川市瀬川町瀬上	修正会	—	牛玉宝印	田の畦へ立てる、小豆粥あり	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
35	紀の川市粉河粉河寺	爆竹(とんど)会	114	牛玉杖	小豆粥あり、苗(イ)の水口に立てる、樹の木に供える	『粉河町史』5巻
36	紀の川市藤上	修正会	18	牛玉杖		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
37	紀の川市名手上	修正会	12	牛玉宝印		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
38	紀美野町大色垣河長寺	修正会	16	牛玉杖		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
39	紀美野町国宮大日堂	御田	旧18	牛玉宝印	成木煮め	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
40	有田町南条川蓮華寺	コノ木	12	牛玉杖 コノ木・福杖	竹に挟み苗代に立てる	『金剛阿闍梨』下巻 『金剛阿闍梨』下巻
41	有田町閑庭田西光寺	おこない	13	牛玉杖 (樹)	福杖で床板を叩く、牛玉宝印を苗(イ)の水口に立てる	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
42	有田町南栗生吉寺(栗師 堂)	おも酬と堂佳式	15	牛玉宝印 (事務) 牛玉杖	懸置した牛玉宝印を苗代の水口や畑、杖に挟み、立てる、牛玉宝印で餅を包む	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
43	有田町中野阿弥陀堂 (ない)	中興堂佳式 (おこ ない)	15	牛玉宝印 福杖 (樹)	牛玉宝印を畑に貼る、成木煮め、苗代の水口に牛玉宝印を立てる	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
44	有田町門二沢観音堂	おこない	16	牛玉宝印 牛玉杖	観音寺牛玉宝印と観音寺牛玉宝印を配布される、熊野牛玉宝印は樹への枝元に置くところを除く のり丸、観音寺牛玉宝印は水口に立てる	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
45	有田町門二川	おこない	15・6	牛玉杖 牛玉杖	牛玉宝印をツラヂ(ツツノク)の根に挟んだ牛玉杖を供え参拝者に配り、五月の苗代に立てた	『近畿民俗』66・67・68号 (1976年)
46	有田町門邊井阿弥陀堂	おこない	13	牛玉 福杖	堂で牛玉宝印と福杖を授かる、牛玉は竹の根に挟み田の畦に立てた、福杖を割り大根のように し小豆粥に供えて配る	『近畿民俗』66・67・68号 (1976年)
47	有田町中野栗師堂	おこない (列葉師 講)	12	牛玉宝印		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
48	有田町中野栗師堂	おこない (列葉師 講)	12	牛玉		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
49	有田町門抄野原山美師堂	観音堂会式	14	牛玉宝印	新庄に堂守が牛玉宝印を制る、会式に日には牛玉宝印を大根や小豆粥などともしに盛て供え る、堂守が牛玉宝印を配り、各戸では玄関や炊事場に掛け回しとした	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』
50	有田町高津尾観音堂	観音供養 (皆佳)	13	牛玉宝印 観音の木・神木 (樹)	福杖で堂へした観音(観る、床の間に貼る、苗代に立てる、成木煮め、小豆粥あり	『中津村史』通史編
51	有田町三十三井(地蔵堂)	フナト	13	牛玉杖 (福院・地蔵院) 牛玉杖 (いへ・漆)	白米と串焼を牛玉杖に包み牛玉杖の根に挟んで持ち帰る、小豆粥あり、成木煮め、粉を舂いた 根に竹に紙を挟み苗代の水口に立てる	『中津村史』通史編
52	有田町町下原地蔵堂	フナト	12	牛玉杖 牛玉杖・コノサン(いへ)	白米と串焼を牛玉杖に包み牛玉杖の根に挟んで持ち帰る、小豆粥あり、成木煮め、粉を舂いた 根に竹に紙を挟み苗代の水口に立てる	『中津村史』通史編
53	有田町高川町東山本藤師堂	バチハチ祭り	18	牛玉杖	牛玉で堂の仕や祝賀を叩く、回(コノ)牛玉と黒文字の(コノ)牛玉あり、飯代は伊藤家で保 賀、真意を面であげた丹土(いへ)タイイ(で採取)を印刷にして持参、回(コノ)首は自任に持 参り布部の下に敷いて授け参賀、黒文字の(コノ)首は地方に配った後に八丁(成)に水口に立て る、神名紙、体に悪いところがある日とは印を顔に当てる	『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』(本文 編)
54	那智勝浦町下和太入泰寺	バチハチ	18	牛玉杖 牛玉杖 (樹)		『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』(本文 編)

※ 「牛玉」「牛玉」の表記は原典の報告に拠った。

もう少し行事内容を細かく確認してみよう。正月年頭のおこない行事であること以外には、①牛玉杖（ハゼの木・柳の木を使うかは地域性がある）を使つてパチパチと堂内をたたく僻邪（乱声、厄難除け）としての要素、②「なれなれ柿の木、ならんかつたらはつたにしょ」などと歌いながら柿の木の芽を撫で（歌詞は地域により異なる）、樹木の生育を祈願する成木責め（害虫除け・豊作祈願）で牛玉宝印を使われること、③牛玉宝印を田の水口に立てて豊作祈願・害虫除けとする水口祭りを使うこと、④厄難除け・年占いとして小豆粥を伴うこと（杖を小豆粥の箸として杖を使用したり、牛玉宝印を小豆粥で貼り付けるなど）、⑤堂徒（堂渡）式が行われる（入座儀礼）こと、などの諸要素が併存するところに特徴がある。そのほか、数は少ないながらも、⑥的射・弓打、⑦舞などが行われる例もある。和歌山県下の「牛玉」に関わる民俗にはこのような特徴があり、全国的な傾向と照らし合わせても大きく違わない。次に個別に興味深い習俗も見られるので、少し紹介しておきたい。

〈宝珠・宝印〉

宝珠の使用も各地で特徴的である。三か所に宝印（宝珠）を捺すという事例は多く（九度山町笠木など）、実際そのように捺されている牛玉宝印も見受けられる（高野町杖ヶ藪・東又）。ただ、かつらぎ町花園中南の「ごうおし（牛玉宝印押し）」では、朱の宝印を五・六か所に捺すといい、地域によりその数は異なる。紀の川市上鞆渕の久保地区では、牛玉宝印に通常は宝珠を三つ捺すが、一枚だけ九つ捺したものを入れ、それを「ココノツタマ」として珍重したという。また、橋本市恋野では、全部で一八〇枚の牛玉宝印を刷り、そのうち宝珠を七つ捺したものを二枚作り、ほかは五つ捺すという。九度山町北又久保地区では、牛玉宝印を各家で四枚持ち帰るが、その内の一枚目には宝珠を八つ、二枚目には九つ、三枚目には四つ、四枚目には五つ捺したものであったという。紙面に捺す宝珠の数にも意味があったようであるが、その意味するところは判然としない。

また、各地の修正会でもよく見られるように、宝珠を牛玉宝印（紙面）に捺すのではなく、参拝者の体（額）に

捺すことも行われた。橋本市恋野では、宝印（宝珠）を頭の上にかざす。また、日高川町串本や下田原地藏堂などでは、体に悪いところがある人は、式終了後に宝印を当ててもらうと治るといわれていた。このように宝珠自体を参拝者に捺すことで、体の悪い部分を直す、厄（難）除けとしての効験があった。紙面に捺す場合、体に捺す場合などバリエーションはあるが、千々和到氏も指摘するように、宝印を捺す（授ける）⁽⁵⁾ことに本質があり、片方は直接参拝者に、紙に捺すことは持ち運び（持ち帰り）を意図した行為なのだろう。

なお、宝珠を捺すための朱は、丹土を酒で溶いて印肉とする事例が多い（橋本市恋野は紅柄）。日高川町串本では、ハネノタイラで採った丹土（赭土・赤土）を酒で溶いて、鍋墨で刷るといい、赤土を採る場所にもこだわりがあった。

〈牛玉宝印の使い分け〉

「村の牛玉宝印」は一種類だけでなく、二種類の牛玉宝印の配付される場合があり、また用途に応じて使い分けられていた。⁽⁶⁾

日高川町串本の場合を見てみよう。約五三cmの牛玉木を用意し、黒文字のゴ（牛玉）と厄のゴ（牛玉）を準備する。一月八日に、参集した区民は黒文字のゴ（牛玉木）で堂の柱・壁を叩き、力いっぱい打ちつけて棒をたたき割る。この音により悪魔を撃退するという意味があったという。黒文字のゴの先端を割いて、この部分に牛玉宝印を差し挟み、自宅へ持ち帰る。黒文字のゴは、二本ずつ水田を作っている家の数だけ拵える。厄年の人は去年のものを使用する。厄のゴは、儀式終了後、牛玉紙を厄年の者が自宅へ持ち帰り、その夜布団の下に敷いて寝る。翌朝、美しい火で焼くか、頭から順に上半身を撫で、川へ持って行って流す。この時に、後を見ずに帰ってくるのが大切である。このゴは総じて悪魔払いの働きがあると言われている。黒文字のゴは、その年の恵方に供えておき、十八夜に苗代の水のあて口へ立て五穀豊穡を祈る。日高川町串本では、厄年か否かで、牛玉宝印の使用の仕方が異

なる。また牛玉宝印が人形としての役割を果たしていた点も興味深い。

さらに、熊野の牛玉宝印と「村の牛玉宝印」の二種類が使われている有田川町二沢の事例もある。二沢観音堂では、正月六日のおこないで、読経のあとに牛玉宝印が配付される。その時に、観音寺牛玉と熊野牛玉宝印が配付され、前者は一月一日に田の水口に神の札として立て、後者は病人の枕元に置いておくと治ると信じられる魔除けの札であるという。なお、二沢の熊野牛玉宝印は、江戸時代に観音堂の鍵取（堂守）であった中山作太夫が六十六部回国修行に出た際、熊野本宮から授かったものとも言われている。この場合は、導入の時期差と効用の差ということになる。

〈牛玉宝印の使い方〉

「村の牛玉宝印」は、多くの場合、①木（牛玉杖・福杖）に挟む、②そのまま配付する、のであるが、まれに③木や版木に巻く（高野町杖ヶ藪・東又、紀の川市東大井）、④餅などを包み牛玉杖に挟む（有田川町粟生、日高川町下田原）、といった形でも使われた。家に持ち帰ったあとは、厄難除けとして玄関に貼ったり（有田川町中野）、豊作祈願・害虫除けとして田（苗代）の水口や畑（庭木）に立てる地域は多い。主には、豊作祈願と虫除けとして利用された点に特徴がある。九度山町北又久保地区では、約八〇cmの漆の木の皮を剥いだ福杖に牛玉宝印を挟み、苗代の時に田の水口に、ツツジのような色花と櫛とを一緒に立てた。橋本市恋野では、牛玉宝印をススキと一緒に苗代に立てたという。田の水口に立てる際にも、様々な形で祀ったのだろう。

家に持ち帰った牛玉宝印は、しばらくの間、仏壇などに供えた。日高川町下田原では、寺で用意された牛玉宝印を四つ折りにして、櫛の木で作った牛玉木に指し、三本一括りにし、仏壇に供えた。⁽⁸⁾なお、牛玉木は地藏堂のなかにあらかじめ置いておき、参拝者は参拝すると白米と串柿をもらふたの中に入れ、行事終了後にもろふたの中の白米と串柿を取り出し、それを牛玉紙で包み、さらにそれを牛玉木の先に挟んで家に持ち帰った。白米と串柿は一五

日朝、小豆粥を炊くときに一緒に釜に入れた。また小豆粥を炊くときには、牛玉木のうち一本はかまどへくべ、別の一本は小豆粥を重箱に入れて柿の木などに供え、成木責めの際に叩くのに使った。牛玉紙は仏壇に供えておき、稲蒔きの際に、竹に挟んで苗代の水口に立てた。また、かつらぎ町花園中南では、おこない終了後に牛玉宝印の配付を受け、一五日まで床の間に飾っておき、福杖に挟んで田畑に立てて豊作祈願した。

家で祀る際には小豆粥で牛玉宝印を貼るなどした。⁽⁹⁾ 九度山町笠木の家では、受け取った牛玉宝印を小豆粥で家の鴨居に貼り付けたり（今は玄関に立てかけ）、田の水口へ立てかけたり、小正月で小豆粥を作った際に牛玉杖の先端を切って箸としたりするなどした。高野町杖ヶ藪では、行事終了後、ゴウの札（牛玉宝印）を線香の煙で清め配付を受ける。その後、小豆粥の汁で牛玉宝印を玄関・蔵などに貼ったり、しめ縄につけて柿の木に結びつけたりした。

〈牛玉杖〉

杖は牛玉杖のほか、剛杖（ゴウヅエ）や福杖など、呼び名も様々なバリエーションが存在する。ゴウ杖は、悪魔祓の剛卯杖に起源があるとの指摘もあり、必ずしも「牛玉」「牛王」（牛黄）との関わりが想定できるかどうかは意見がわかれるが、杖の先に牛玉宝印を挟むことにも特徴的なように、その関わりは深い。

牛玉杖の素材は、①ハゼ・漆、②柳、③柏、④樫、⑤竹、というように村によつて異なる（主に木の皮を剥いで使う）。有田川町沼田では福杖は二本準備し、一本は竹で、もう一本は柏であるという。なお、橋本市恋野では、配付の牛玉宝印は四つ折りにし、九〇枚一束にしたものを二つ準備し、約一メートルの栗の木に縄で結んだという（牛玉杖は約五〇cmのハゼの木）。祭礼の際に括りつけておく木と、自宅へ持ち帰り、家で祀る際の木の枝は異なる場合もあった。

* * * * *

表2 和歌山県下の牛玉宝印版木

[illegible]

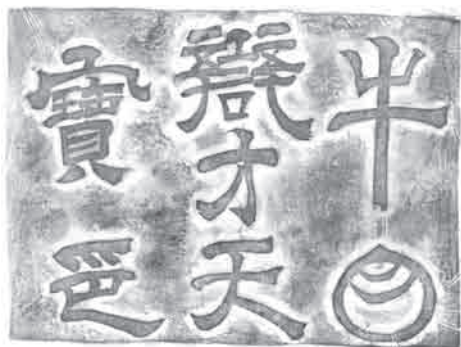
以上、和歌山県下における「牛玉」をめぐる民俗事例を紹介した。様々な利用のされ方を見ることができ、これまで指摘されている中世の寺社（東大寺や東寺など）での事例などと符合する習俗も見られる点が興味深い。和歌山県下の村々で行われている行事も、中世に遡る習俗の可能性が考えられる。水口祭りに利用される事例は滋賀県などでも多く報告されているが、成木責めの際に使われる点などは、紀伊半島の山間部における生業とも関わって展開された習俗なのではないだろうか。地域の生業のなかで、利用のされ方も異なっただろう。

二 版木からみる「村の牛玉宝印」

次に、これら牛玉宝印をめぐる儀礼を考えるにあたって、牛玉宝印を刷る版木に着目し、「村の牛玉宝印」のあり方について、さらに考えてみることにしたい。牛玉宝印版木に注目するのは、①今は失われてしまった「村の牛玉宝印」儀礼の存在を確認できる点、②年代や利用状況を知ることができる点⁽¹⁾にある。そこで、まずは和歌山県下における「村の牛玉宝印」版木の残存状況について紹介しておこう（表2）。

当然、版木が残されているということは、現行、もしくはかつて牛玉宝印を刷って配付していたことを物語る。そのため、表1の情報をさらに補うデータともなる。さて、表2を見てまず気づく点は、表1と同様の地域的な分布傾向を示しているということであろう（図1）。すなわち、紀北、高野山周辺に濃密に分布する一方、熊野三山周辺や紀伊半島沿岸部には見られないという特徴である。

また、デザインについて（図2）。料紙を縦長とするもの（18）、料紙を横長とするものの二系統あるが、現状ではその点で形態編年を行うことは難しい。枠のあるもの（13・17・18・22・23）、ないものなどもある。また刷られる文字に着目すると、各地の霊地・霊場の牛玉宝印に見られるような神使いとしての霊獣・霊鳥類（鳥・蛇・鳩など）は象られていない。ただ、文字に宝珠のデザインが盛り込まれているものはいくつか確認できる（3・



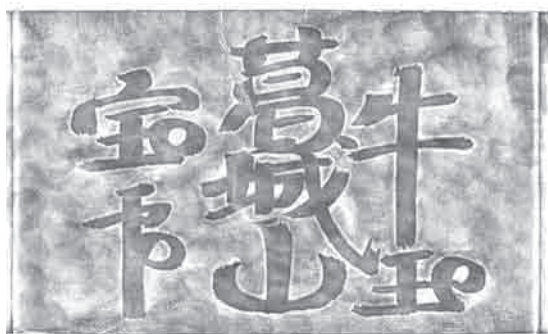
3 弁財天牛玉宝印



4 円通寺牛玉宝印



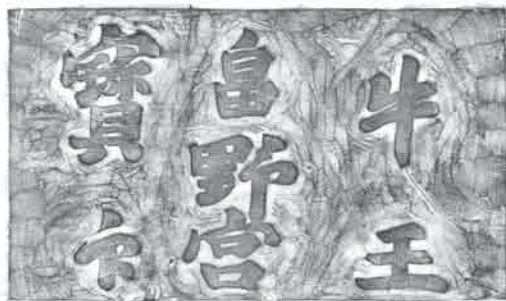
3・4 宝珠



13 葛城山牛玉宝印



15 地藏寺牛玉宝印



16 畠野宮牛玉宝印



17 西方寺牛玉宝印



18 十輪寺牛玉宝印



19 大師寺牛玉宝印



20 獨古寺牛玉宝印



21 蓮華寺牛玉宝印



22 觀音寺牛玉宝印



22 宝珠



23 藥王寺牛玉宝印



23 宝珠

4・15・19・22・23。特に、年代が判明するものでいえば、古い（中世の）ものほど宝珠が象られている割合が高く、新しいものは文字のみとなる傾向にある。年代や意識の違いを示しているのではないか。時代を経るにつれ、本来的な信仰（宝珠・宝印に対する意識）が薄れてきたことを示しているのかもしれない。ただ、宝珠（朱印）は別途残されているものも多い。

次に年代について。現在確認できる牛玉宝印版木のうち、年代が判明するもの〈3・11・15・22・23・26〉では多くが一六世紀後半に遡る。「村の牛玉宝印」が一六世紀後半以降、各村々で儀礼として行われるようになった可能性を示唆する。ただし、銘文があるというだけで、現在残る版木もそれ以前からあるデザインの復古という可能性もあるため、より慎重に検討が必要である。

表面観察をすると、「寺社名+牛玉宝印」の文字は陽刻し、年号などの銘文は陰刻するのが基本である。そして牛玉宝印の文字は使い込んで角が丸くなっているもの〈4・17・20・22・23〉と、角が残っているものの二種類がある。使用回数（利用状況）もうかがえる。平面も、ノミ跡が残っているもの〈16〉、カンナなどで調整し平滑なもの〈3・13・18・19・21〉などある。

宝珠は火炎と梵字ならなる。

最後に、若干例外的な版木の存在を紹介しておこう。白浜町の正木家先祖講には、板牛玉が残されている。版木状ではあるが、刷る目的で作られおらず（文字が逆に彫られていない）、専ら信仰対象となった版木である（写真1・2）。熊野那智大社の神官の一族と伝える正木家一族では、白浜の綱不知へ移住に際し、熊野牛玉宝印を捧持して来た。代々当番となる家が神棚（オヤシロ）に入れて祀り、当番交代の際には神棚ごと引き継ぐという。表と裏とともに熊野の烏牛玉宝印のデザインとなっており、使用した痕跡が認められない。版木とは異なるが、紀南の版木文化の一例として紹介しておきたい。

村の牛玉宝印



写真1 板牛玉（熊野山宝印）



写真2 板牛玉（那智滝宝印）

採取できた事例の数が十分とはいえ、形状・構造などより形態編年をすることなどは未だ難しいが、さらに事例を収集し比較検討材料を揃えていく必要がある。ただ、高野山麓に多いという地域的傾向、一六世紀後半に遡るものがまとまって残されているという傾向についてはおさえておきたい。

三 文書にみる「村の牛玉法印」

村文書のなかで、牛玉宝印儀礼はどのように表れるのか。特に、その出現期である中世の古文書のなかから、「村の牛玉宝印」を探ってみよう。相賀荘柏原村（橋本市柏原）では、一六世紀に「牛玉」の語が見える。

【史料1】正月入目日記⁽¹³⁾

（端裏書）「正月よろつの入目」

元龜三年二月廿四日

御ちやうはいの事^(朝拌)

一升もろミさけ^(酒) くつかたのもち以上四せん^(餅)

こんけんへまいる、かしおけ一ツ^(菓子桶)

一斗二升もちこめ^(餅米) 六升のさけの米

御ちやうはいのいりめ^(入目)のふん

二日のおこないに

三帖牛玉かミ^(散米) さんまい一升ツ、

来年のさし^(差頭)とうに牛玉一本二料足一文ツ、

六日の御さくとうの米ハ

同(土器)かわらけ十二

一斗六升ツ、一升さんまい

十一日御きたうのおろしの米、しやうし(承仕力)二渡、

一斗二升 一升さんまい・札(紙)か三十枚・かわらけ六

十一日の大日(田入)たいりにはわか(若衆)しうのはうに

めしあり、

一斗 こんけん(村)へむらより神主(参)へまいらせ候、

二日のおろし物二、

一斗 そうふくしのとしとり物二むらからまいらせ

候、十日のけちん(結鎖)のとうハ五人、とうひかし山

五てう・十二かわらけむらふ(村夫)、とうなミにかミ

二枚ツ、廿六文まとのふせ(的)くう人(布施供)に牛玉一本

にめし、

ミやうきんちやうの事

いてきたるむすめ(娘)のこに米二升ツ、のさしとう

ねう(女房)はうむかへたる人ハ、これも二升ツ、のさしとう

月の十二日(夜宮)ことよミやとうに一升五合ツ、

十五日に二大目たツる二御木(御酒)一升

一斗二升 (谷内) たにうちしやうかとのふせに

正月の御ふつしやうまいりハ大つ(晦日)もこりに夜ま

いる、一日二まい、三日二まい、六日二まい

る、(年越)としこしにまい、十四日二まい、

一斗二升御ふつしやうの物二しやうしへ、むらよりおろす、

元龜元年（一五七〇）に記された正月行事の準備品・下行物を書き上げた史料である。正月二日のおこない行事で、「牛玉かミ」（＝牛玉宝印）が三帖準備されている。また、来年の頭屋に「牛玉一本」を負担させることも記される。一本とあるように、牛玉宝印を挟んだ木である「牛玉杖」を表しているのだろう。結鎖という的（弓）打ちで供人には「牛玉一本」につき「めし（飯力）」も渡された。柏原村のおこないでは、的打ちがかつて行われていたこともわかる。

このように、これまで見てきたおこない行事のなかで使用される牛玉宝印・牛玉杖は、古文書と版木から一六世紀まで遡る儀礼・習俗と位置づけることができる。ただし、中世の段階では参拝者全員に配付されるのではなく（現行民俗では一八〇枚や二〇〇枚刷る）、あくまで頭役負担者（差頭・供人）というごく限られた範囲の人々に配付されるものであった。すなわち、牛玉宝印は一六世紀より使用されてはいただろうが、それが護符として村全体（各戸配布）に広がるのは、さらに後の時代（江戸時代以降）ということになるのだろう。

また、中世の村で行われた修正会の次第も高野山麓には残されている。

【史料2】修正会導師作法 下巻⁽¹⁴⁾

（前略）

次宝印取持テ牛玉導師作法 三礼如来唄／金打／

為令法久住利益人天ノ釈迦牟尼宝号

抑正月修善ノ砌ナレハ、御願貴賤上下各々成就

面々円満給フ、開キ如来最上ノ御倉ヲ、牛玉

宝印ヲ取出給エリ、福寿増長ノ宝印トセシナリ、

仍以テ五種真言、不動真言、毘沙聞真言

牛玉宝印ヲハ無尽ノ大法蔵トコソ申スヘカリケレ、

修正ノ勤行シ給フ諸人功德受命司宦爵

如ク心ノ円満シテ千秋万歳不可有尽事、謹

奉願

至心發願、正月修善、牛玉宝印、加持香水

錫杖守護、恭敬頂戴、功德威力、天衆地類

倍僧法衆、行瘦神等、威光増益、当所神等

離業得果、聖朝安穩、天長地久、天下泰平

万民豊樂、庄内安全、五穀蚕養、如意満足

一切善願、平等利益、モツ

衆生無辺誓願度、福智無辺誓願集

法門無辺誓願覺、如来無辺誓願事

無上菩提誓願証、南無地味増長盛穀

南無蚕養如意満足、南無一切所求合満足、

南無如意宝珠、南無如意、

天文拾年三月 日、神野庄於津川村

雖為言語道斷惡筆、仏法興隆ノタメニ如是

四国之住人乗識申者、暫小堂ニ堪忍仕折節

前ノ本破候間、かきウツシ候、後見之人御笑可有之

峰ノ大師堂エ奇信申候、

この史料は、神野莊津川村（紀美野町津川）の遍照寺で行われた修正会の次第であるが、奥書にあるように天文一〇年（一五四一）に津川村小堂を訪れた四国住人乗識が以前の本が破損していたのを書き写したものであるという。全体で二巻にまとめられ、村の修正会の次第を知ることができる貴重な史料である。津川村の修正会は、初夜として「一切恭敬」「散花」「礼盤」「歎仏呪願」「発願」「如法念誦」「諸真言」「大懺悔」、後夜として「登礼盤」「礼仏頌」「三礼 如来唄」「一切恭敬」「三十二相」「表白」「神分」「祈願廻向」「神名帳」「心経一卷」「勧請」「御明文」「六種廻向」「錫杖」「教化」が行われ、宝印を持って「牛玉導師作法」、最後に「五大願」が行われた。正月に如来の蔵から取り出した宝印でもって、「福寿増長」を祈願し、各種の真言を唱える儀礼であった。宝印は「福寿増長無尽ノ大法蔵」とも表現され、福を得るということに主眼があった。祭文のなかでは、「聖朝安穩」や「庄内泰平」のほか、五穀豊穡や行疫神退散なども祈られる。正月のおこない行事の信仰を示すものといえよう。如来の蔵から取り出された宝印の授与ということに本質がある。

【史料3】修正会講式⁽¹⁵⁾

修正会導師法則

(中略)

次五大願 衆生無辺等

牛王宝印 得令驗知 護持頭番 護持満堂

増長宝衆 次加持タラニ

薬師大呪 次仏名へ云所マテモツヘシへ 三反

南無歸命頂牛王宝印生々世々値遇頂戴

哀愍摂受護持満堂

次教化 福杖ツク

牛王宝印をさゝくれハ七珍万宝は雨の

ことくに降りかゝりけり然らハ万堂の諸人

悉くたもとに請て千秋万歳のたち

給ふけれハとこそありけれ

金一打

次宝印 次宝印

南無薬師如来へ一打へ 南無日光遍照へ一打へ

南無月光遍照へ一打へ 南無十二神将へ一打へ

次廻向 廻向三宝願海

廻向天衆地類 廻向当処権現

廻向行疫神等 廻向弘法大師

廻向貴賤靈等 廻向聖朝安穩

廻向護持大衆 廻向伽藍安穩

廻向天下法界 廻向無上大菩提

為所願成并 觀音宝号へ一打

御子舞定

文明二年卯月中旬紀州華蘭中南為興隆仏法

檀那繁昌筆記後残写之畢、右筆俊乗房良意

文明二年（一四七〇）に記された花園莊中南村（かつらぎ町花園中南）の修正会の次第書である。中略部分は、「三礼へ二打」に「如来唄」「御明申」「神分」「小祈願」「教化」「御明文」が順に記される。本史料ではそれに続けて、「五大願」以下の次第が記されている。祈願内容は、津川の場合と概ね同じである。所作としては、福杖を突いている点にも注目したい（乱声、堂内を叩く所作^カ）。また、牛玉宝印の効能について、牛玉宝印を捧げれば七珍万宝が降り注ぎ、牛玉宝印をそばに置いておくことで長寿を得られるということが記されているのも、津川村の事例と意識的には同じである。牛玉宝印授与により、福を得ることができる、そのような意識のもと行われていた行事・儀礼であった。同時に「行役神等」の廻向も行われている。牛玉宝印の使い方の詳細までは知り得ないが、福を得ると同時に、厄難除けとしての意識は、少なくとも一五・一六世紀より見られるのである。

そして、【史料2】¹⁶【史料3】のような講式（次第書）が一五世紀末以降に書写され、村に残されていることにも、改めて注目する必要がある。【史料1】のような年中行事書のなかに、牛玉紙（帖）・牛玉杖（本）が登場するもの、ほぼ同時期（一六世紀）である。すなわち、一五世紀末―一六世紀頃に「村の牛玉宝印」が記録のうえで登場し、また版木も一六世紀後半以降のものが残されている状況であり、その関連性が想定されるのである。

おわりに

以上、和歌山県下における「村の牛玉宝印」（村の堂社名を象り、ほぼ村内のみで通用する局地的な牛玉宝印）の儀礼と歴史について、民俗（祭礼・儀礼）、版木、古文書を素材に紹介した。そして、高野山周辺に濃密に分布するという地域的特徴、一五・一六世紀頃より見られるようになるという時代性についても触れた。

高野山麓に濃密に分布するという地域的な傾向について、想定できる可能性を考えてみたい。白浜町や上富田町などでは年頭に熊野三山へ直接牛玉宝印を受け取りに行き、それを苗代に立てるという事例が報告されている（『上富田町史』など）。熊野三山周辺では、熊野の牛玉宝印の影響が強く（さらに距離的に近いため）、年頭に熊野三山へ参り牛玉宝印の配付を受けたため、村に「牛玉」の民俗が残らなかったのかもしれない。一方、高野山麓の村では、（高野山の僧などを介して）修正会が村に導入され、村堂などで正月行事を実施することになった結果、このような残存状況を示すことになっているのではないだろうか。いわば、村と霊地・霊場（ないしは大寺社・荘園領主）とがどのような社会的関係にあったのかを示唆するのではないだろうか。⁽¹⁷⁾

次に時代的な傾向について、一六世紀の版木が残され、「牛玉」が一五・一六世紀の村文書に見えるようになることをどのように評価するか、という問題がある。いわば、「村の牛玉宝印」の成立、ないしは移り変わりということになる。一五・一六世紀に新規に版木が調達され村で刷られるようになったのか、はたまた当初は（熊野三山周辺と同様）高野山より牛玉宝印をもらってきてて祭礼を行っていたのが一五・一六世紀に村自らで調達・準備されるようになったのか。もしくはもともと古い（一五世紀以前から）版木があったのを作り直して、結果として残ったのが現状の版木なのか、熊野三山周辺の村々にも「村の牛玉宝印」はあったが、熊野の烏牛玉の普及過程で淘汰されてしまったのか、など様々な想定・解釈が可能である。それは、中世前期の村の修正会を如何に理解するか（村で牛玉宝印の儀礼があったのかなかったのかなど）、という問題とも関わる重要な課題である。ただ、一

五・一六世紀に紀州の村々では大般若経がセットで読えられている傾向と同様であるという点には、注意する必要がある。⁽¹⁸⁾さらには、修正会次第書や神名帳などの聖教も同じ時期より残され始める。村堂の什器（祭祀道具）が一五・一六世紀にかけて徐々に調えられている状況、すなわち儀礼の整備（普及）の状況を示すのではないだろうか。しかもそれは村の変遷とも大いに関わる動向である。⁽¹⁹⁾

このような状況から勘案すると、和歌山県下の「村の牛玉宝印」は中世後期（一五・一六世紀）に高野山の影響のもと広がった文化・祭礼であると結論づけることができるのではないだろうか。ただ、紀南においても那智勝浦町の大泰寺で例外的に行われていること、さらには高野山金剛峯寺での修正会との直接的な系譜・影響関係など、なお検討課題は多い。このような「村の牛玉宝印」は、修正会の広がり、さらには熊野の烏牛玉が江戸時代に全国的に普及していく状況（普遍化の流れ）と如何なる関係にあるのか、あらためて検討してみる必要がある。

また本稿では、民俗（祭礼）・歴史（さらには工芸品）にまたがる学問領域の素材である牛玉宝印（とその版木）を取り上げて検討した。牛玉宝印や版木をはじめとする仏教民俗資料は、各学問分野においても周縁に位置する文化財であり、これまで十分に取り上げて、検討されてこなかった。改めて、村の什物としての版木の重要性、その資料としての価値・可能性にも注目したい。版木と刷られた牛玉宝印は中世以降の村人等の信仰を伝えてくれるのはもちろんであるが、現在には失われた祭礼や寺社の存在を我々に教えてくれ、また村の什器の整備過程を知ることができる稀有な資料である。そのような視点で、版木と牛玉宝印の類例を集め、今後調査研究を進めていく必要があるだろう。

【注】

- (1) 千々と和到氏は、村々の牛玉宝印（および版木）の調査・研究・保存の重要性をいち早く指摘する（千々と和到「書牛玉」と「白紙牛玉」石井進編『中世をひろげる―新しい史料論をもとめて―』吉川弘文館、一九九一年）。なお、護符研究の現状や最新の成果については、千々と和到編『日本の護符文化』（弘文堂、二〇一〇年）参照。
- (2) 相田二郎「起請文の料紙牛玉宝印について」（『日本古文書学の諸問題 相田二郎著作集1』名著出版、一九七六年）。
- (3) 全国的な傾向については、倉石忠彦・倉石美都「神社の護符―神社のおふだアンケート」のまとめ（『千々と和到編『日本の護符文化』前掲）がある。また、近江国の牛玉宝印を集めた一寸木紀夫「近江の牛玉宝印」（『滋賀県地方史研究紀要』一三、一九八八年）、一町規模で版木・牛玉宝印の儀礼を集成した兵庫県多可町の事例などがあり（『多可町の版木』兵庫県多可町文化遺産活性化実行委員会、二〇一三年）、参考になる。
- (4) 五来重氏の分類によれば、修正会・修二会（おこない）には、牛玉杖と牛玉宝印を加持し一般に授与する「牛玉型」があるとする（『仏教儀礼の民俗性』五来重著作集 第一巻 日本仏教民俗学の構築）法蔵館、二〇〇七年）。
- (5) 千々と和到「書牛玉」と「白紙牛玉」（前掲）。
- (6) 東大寺でも各堂社による各種の牛玉宝印が使われており、起請文に使用するものとうでないものとの使い分けがあったのではないか、という想定もある（千々と和到「東大寺にみえる牛玉宝印」（『南都仏教』三九、一九七七年）。
- (7) 京都・東寺の御影堂・千手堂では、牛玉宝印が餅（壇供餅・鏡餅・花平餅）と一緒に配付されていた（千々

和到「書牛玉」と「白紙牛玉」前掲。

- (8) 三角に折られる牛玉宝印の事例がある（千々和到「牛玉の折り目―本所所蔵・土阿起請文料紙、赤崎宮牛玉宝印の検討―」『東京大学史料編纂所研究紀要』二、一九九一年）。

- (9) 玄関先に貼る習俗などは、洛中洛外図屏風などの絵画資料で確認できる（千々和到「描かれた牛玉宝印」『日本文化研究所報』一八三、一九九五年）。

- (10) 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会、二〇一五年）。

- (11) 元興寺文化財研究所による一連の成果がある。その概要を示した稲城信子「護符版木の調査の世界と課題」千々和到編『日本の護符文化』前掲）や、『版木―刻み込まれた信仰世界―』（元興寺・元興寺文化財研究所、二〇一六年）参照。

- (12) 島津宣史「板牛玉と瀧本牛玉宝印」『神道及び神道史』四八、一九八九年。筆者も平成二六年（二〇一四）度の和歌山県立博物館企画展「墨一色―拓本と摺物の世界―」にかかり、調査のうえ、展示を行った。

- (13) 柏原区有文書八八号（『和歌山県史』中世史料二）。

- (14) 遍照寺文書（『中世の村をあるく―紀美野町の歴史と文化―』和歌山県立博物館、二〇一一年）所収。

- (15) 中南区有文書一三六号（大阪大学文学部国史研究室「中南区有文書」『大阪大学文学部紀要』二〇号、一九八〇年）所収。史料本文に付されたルビは省略した。

- (16) 同じように、中世後期（とりわけ一六世紀後半以降）になると、神名帳や祭文も村の文書のなかに残されるようになる。例えば、神野・真国・真国村では天正十一年（一五八三）の祭文が残されている（高岡家文書、『美里町誌』史料編Ⅰ―四六〇、そのほか年未詳の神名帳もあり）。また花園莊中南村でも天文二二年（一五五三）の千輪祭文が残されている（中南区有文書）。

(17) 近江国の事例では、和田光生「湖北オコナイの成立について―地方霊場寺院と村落寺院の影響―」（『京都民俗』六、一九八八年）が参考になる。

(18) 一五・一六世紀に大般若経がセットで調えられる背景として、竹中康彦氏は「紀州における村落の自立的傾向と、それにとりまなう軋轢のなかで、村落を守る功德のある大般若経に対する需要が高まったことが背景にある」（「紀州における大般若経の展開に関する予備的考察『木の国』二八、二〇〇二年）と指摘する。村での大般若経を用いた儀礼の成立の時期ともかわろう。

(19) 中世成立期より村々で修正会が行われることと、このような「村の牛玉宝印」のあり方はどのような関係にあるのか。また、「村の牛玉宝印」の成立・普及は、村文書（地下文書）の問題とも密接に関わるのではないだろうか（春田直紀編『アジア遊学二〇九 中世地下文書の世界―史料論のフロンティア』勉誠出版、二〇一七年）。中世村落論を考えるうえでも重要な素材と言えよう。

【参考文献】（本稿で使用した和歌山県下の事例は以下の報告等による）

『高野町史』民俗編（二〇一二年）

『改訂九度山町史』民俗・文化財編（二〇〇四年）

『橋本市史』下巻（一九七五年）

『橋本市史』民俗・文化財編（二〇〇五年）

『高野町誌』下巻（一九六八年）

『かつらぎ町誌』（一九七六年）

『粉河町史』第五巻（一九九六年）

- 『打田町史』第三卷（一九八六年）
- 『下津町史』通史編（一九七六年）
- 『金屋町誌』下巻（一九七三年）
- 『美山村史』通史編 下巻（二〇〇七年）
- 『中津村史』通史編（二〇〇六年）
- 『龍神村史』下巻（一九八七年）
- 『上富田町史』下巻（一九九二年）
- 『白浜町誌』本編下巻一（一九八四年）
- 『近畿民俗』六六・六七・六八号（一九七六年）
- 『花園村の年中行事』（和歌山県教育委員会、一九八六年）
- 『和歌山県の祭り・行事』（和歌山県教育委員会、二〇〇〇年）
- 『熊野三山民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会、二〇一三年）
- 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』（和歌山県教育委員会、二〇一五年）
- 『国指定重要無形民俗文化財 杉野原の御田舞映像記録解説書』（有田川町教育委員会、二〇一七年）
- 『歴史のなかのともぶち―鞆淵八幡と鞆淵荘―』（和歌山県立博物館、二〇〇一年）
- 『天野の歴史と芸能―丹生都比売神社と天野の芸能―』（和歌山県立博物館、二〇〇三年）
- 『葛城修験の聖地・中津川行者堂の文化財』（和歌山県立博物館友の会、二〇一一年）
- 『中世の村をあるく―紀美野町の歴史と文化―』（和歌山県立博物館、二〇一一年）
- 『紀伊国桂田荘と文覚井―水とともに生き、水を求めて闘う―』（和歌山県立博物館、二〇一三年）

村の牛玉宝印

『弘法大師と高野参詣』(和歌山県立博物館、二〇一五年)

『有田川中流域の仏教文化―重要文化財・安楽寺多宝小塔修理完成記念―』(有田川町教育委員会、二〇一七年)

『牛玉宝印―祈りと誓いの呪符―』(町田市立博物館、一九九一年)

『國學院大學所蔵の牛玉宝印』(國學院大學神道資料館、二〇〇四年)